

2010

monthly
JŌDO

4
April



今 生きていると いう事 (Ⅱ)

今 生きていると いう事
それは 楽しい事ではなくて
かなり きつい事だけど 私は負けない！
こんな 命の危機にあっても 生きてるんだから
神様は 私を 死なせなかった。
きつと 私がいる事に
何か 意味があるんでしょう

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の人

1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

4月の書

表紙の篆刻は実物大（40ミリ×40ミリ）

青色青光 黄色黄光

赤色赤光 白色白光

青い色のものは青く光り

黄色のものは黄色く光る

赤い色のものは赤く光り

白の色のものは白く光る

当たり前のことです。理想的な世界の様子を描いているこの經典に、そんな当たり前のことが表現されています。

つまりそれだけ我々は、理想とはひとつのことになることを思い描いていたのですが、本当の理想は、みんな違ってみんないいで良かったのです。それぞれの個性をそれぞれに発揮すること、それが理想的な世界なのです。（編集部）

東京・尾久

満光寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



二葉山尾久院満光寺の本堂は、昭和44年に高田隆成前住職が建立した。本堂正面の扉には開基となる二葉家の紋が描かれている。また本堂の上には、光が満つる寺ということからデザイナーが考えた光を表すオブジェが飾ってある

写真左は、平成22年1月25日に行なわれた増上寺での教書伝達式後に檀家総代さん達と一緒に撮った記念写真。前列中央が満光寺第29世高田昭仁住職、向かって右隣が高田成保副住職、左隣が美佐子夫人。



満光寺本堂の内陣。建立当初から檀家さんが座る席は土足の椅子席で、内陣を一段高くする作りだった。右が満光寺本尊、阿弥陀如来座像。





平成22年1月25日、大本山増上寺本堂で御忌唱導師の教書伝達式が執り行われた。上は大本山増上寺法主八木季生台下から教書を受け取る高田昭仁住職。中央は本尊阿弥陀如来、八木台下の正面に正座する高田住職。右は伝達式を見守る満光寺の寺族や法類、そして檀家総代さん。



満光寺のお十夜法要
で法話をする高田住職。



お十夜法要で焼香をする檀家さん。



満光寺開山の心蓮社實譽智天和尚の像。

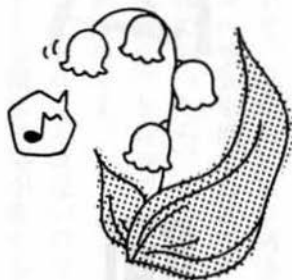


山門左手に満光寺という名前の交差点
があり、奥には都電荒川線が走っている。

浄土

2010/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・尾久 満光寺	撮影=タカオカ邦彦	1
法然上人のお念仏（最終回）	阿満利磨	6
寺院紀行 東京・尾久 満光寺	真山 剛	16
会いたい人 平幹二郎さん③	関 容子	24
響流十方	袖山榮輝	32
春まつりの由来	佐々木美冬	36
連載小説 渡辺海旭（13）	前田和男	38
Jフォーラム		47
浄土句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	51
編集後記		52



表紙題字=中村康隆前浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

法然上人讃仰会
主催
講演会

法然上人の
お念仏

最終回

法然上人の お念仏

阿満利磨

最終回

私たちがどういう人間であるかは、それぞれが背負っている業によって違います。さまざまです。私たちの身体は電気で言えば伝導体です。私たちには「阿弥陀仏」というところから電気が流れてくるのです。その伝導体は次へ電気を流すわけですが、この伝導体である私の中身が電気を通しにくい陶器のような体であつたら、せっかくここまで阿弥陀仏の慈悲が来てくれていて、いくら私が「南無阿弥陀仏」と言っている、陶器であるためにほかの人に電気が流れないということだつてあるのです。

けちな人がお念仏したから急にけちでなくなるといふことはないので。けちな人は大死死ぬまでけちです。我々の煩惱というのは、そんな簡単に姿が変わるものではありません。だから、私たちがその慈悲の実践ができると教えてくださっている反面、できないこともあるぞということ。だからといって、何も絶望したり、失望したり、あきらめることはありません。

ひよつとしたら瀬戸物の体の中に一部錫すずやメッキが紛れてくるかもしれない。そうすれば、ほんのちよつびり阿弥陀仏の慈悲がほかの人に向かつて伝わるということが起こるかもしれない。それが「凡夫の慈悲の実践」というものです。

また時には極めて良質な伝導体、銅でできたような人は念仏を喜ばれるようになる、もうびつくりするような慈悲の実践をされることがあるのです。

東本願寺派のお坊さんで、日露戦争の頃に活躍をした高木顕明というお坊さんは、当時多くのお坊さんが日露戦争の最中に念仏をしながら、みんな「万歳、万歳」と言っていたとき、そんなことができるのだからと疑問を持ったのです。お念仏というのは阿弥陀さんの働きです、名号というのは万人を等しく救う教えです。それを敵と味方に分けて、敵

が死ぬことを願うような、戦勝祈願などということは念仏しながらできるだろうかという疑問を持ったのです。

また、その人は念仏をしてエリートとか権力者にすり寄ることができるのだろうか、そういう疑問も投げかけています。エリートとか権力者というのは、民衆を、人々を大体蔑視しています。民衆の人権を抑圧します。民衆を皆数字でしか見ないから、いろいろ偉そうなことが言えるわけですが、「名号」というのは、力のない人々を救う一番頼みになる教えです。念仏しながらそういう力の弱い人々を抑圧して、平気でいるような権力者にすり寄っていくということは、ちよっとおかしいではありませんかと言っています。

法然上人も親鸞聖人も権力者の手を借りて念仏を進めることだけはするなとおっしゃっています。それは念仏というものの教えから言って、弱い者を平気で弾圧するような生き方と念仏の生き方とは違うということです。

また、その人は念仏しながら生存競争というものを肯定してもよいものだろうかと言っています。念仏者は将来すべて平等に仏になる存在ではないか、本来平等な存在が弱者と強者に分かれたれて、強者は弱者を悲惨な目に遭わせ続ける。それが念仏をしながら許されることだろうか。このような疑問を発しました。

ところが、その人はこういう疑問を持ったがために、ついに「大逆事件」という事件に連座されて死刑の判決まで受けてしまいました。この事件があつてから、日本中の宗教が権力者にすり寄ることになったのです。

権力者にできるだけ気に入られるという道を採用して、何を守ったかという、教団を守ったんです。お念仏を守ったわけでない。念仏を守ろうとすると権力とぶつかる。こう

いう時代が長く続いたのです。

そういう中で、私はこの浄土宗のほうでもやはり忘れてはならない人がいらっしやると思っています。いろいろな方がいらっしやるけれども、例えば、林靈法という方です。

年配の方はご存じだと思いますが、林靈法さんは一九三〇年に大学を出られたわけですが、大学を出て二年目に「新興仏教青年同盟」という、当時の新しい仏教の社会運動であります、その団体の書記長になった方であります。

この新興仏教青年同盟というのは、妹尾義郎という人が主宰した団体であります、戦争中の最も弾圧の激しいときに、もう共産党なども壊滅状態の中で、ただ一つ良心的な運動を展開した、仏教徒としては大変誇りに思っている団体です。

この新興仏教青年同盟というのは、三つの綱領、約束をして結成された全国組織であります。

一つは、それぞれの宗教は、それぞれ「仏様を尊い」と言っているけれども、仏教徒である限りは皆共通してお釈迦様が一番大事であるから、お釈迦様に帰依するところとで統一して、そして、この世に何とかして仏国土、仏様の国をつくろうと、そういう運動をしようではないかということです。

二つ目には、既成教団は期待しないで自分たちでやる。三つ目は、資本主義経済というものには仏教に反する経済思想である。というのは、資本主義経済というのは生存競争ですから、基本的に弱者を切り捨ててやるわけです。

この十年の格差社会を生んだ姿を見れば、すぐおわかりになります。あるいは「新自由主義」という名前の現在の経済がいかに弱者切り捨てであるか。これは仏教でなくとも、

普通のヒューマニズムに照らしても余り賛成できるものではありません。

ところが、この新興仏教青年同盟というのは、「この資本主義経済組織を仏教に反する組織として、仏教に基づく経済組織、社会組織をつくろう」という、ある意味では夢のようなスローガンを掲げて立ち上がったわけです。

そして、一時日本中に一万、二万の同志を得て活動をするわけですが、もうあつという間に弾圧をされてしまいます。そして、この林さんも弾圧をされて、牢獄で長く暮らすようになられたのです。

そして、この留置場の中で彼を支えたのは法然上人の流罪のときの決意であつたわけです。先ほど申し上げた「自分は死刑を行われても念仏の教えを引っ込めるわけにはいかなんだ」と言つて、さらに念仏の教えを高々と掲げたあの法然上人の決意、生き方というものを支えに、長い長い、辛い辛い牢獄生活を送つていったと言つております。

彼は「この世で正しいことを言えば、必ず迫害が生じる。しかし、それに屈してはならないという覚悟が必要だが、その覚悟は信心、信仰によつて支えられないと、それはたやすく折れるものだ」とも言っています。

大事なことは、「信仰」というのはあくまでも個人の問題であるけれども、一度信仰の道において、今までの行き詰まつた自分の壁が突破されて、自分が新たに生まれ変わるようになってくると、本当の人生を得た者、つまり、信仰によつて、信心によつて本当の人生が何であるかがわかつた者は、同時代の社会や人間の運命の問題について無関心でいることは到底できません。

だから、信心を得て自分だけ助かつてよかつたという、そういう信心は眉唾ものであつ

て、信心を得たら、「同時代のこの仲間、この身近なこの人たちをどうしたらいいのか」と思うのは当然である、ということ、念仏が新しい社会的実践に乗り出していくことをいろいろと考えた人です。

今、浄土宗は「共生」ということを盛んに言っておられるけれども、そういう「共生」の思想ということにも、もちろん彼は共鳴したわけです。きょうの私のテーマで言えば、そういう「共生」ということで、本当に生きるためには、この「共生」の根拠を明らかにしておかないと、すぐにどこかで破れてしまうわけです。

その「共生」という、みんなが平等で、皆が同じくこの世で与えられた人生を精いっぱい生きていくことができるようなことが可能になる根拠は念仏にある。念仏にあるということがはっきりしていないと、この「共生」というスローガンも怪しくなってくるわけです。だから、林靈法さんは、この念仏が社会的な実践に乗り出していくことを強く主張されたけれども、その根拠は念仏の、さらにその念仏が、阿弥陀仏が働いておられる、阿弥陀仏の行為であるという一点にあるというところまで突き詰めておかないと、林靈法さんの人生を我々は引き継ぐことにならないと思うのです。

そのように阿弥陀仏の行為である念仏に私どもが足を置くから、阿弥陀仏の慈悲に反するようなことが起これば、それを批判することができなのです。

念仏者は批判などするものではない。中には「宗教者というものは善悪を超えているのだから、善悪のよしあしを論じるようなことは念仏者のすることではない」ということを言う人もいます。しかし、法然上人が流罪のときにはっきり示されたように、念仏に反す

ることが起こったときに「それは間違いだ」とはつきり言うことはとても大事なことです。例えば、戦争中にそれを言えば、林霊法さんのように臭い飯を食わなければいかなんということが待っているわけです。だから、そういうことがあるにもかかわらず言わざるを得ないというのは、先ほどの例で言えば、ある意味全身銅でできたような方だったのでしょうか。そうした場合、そういう人の足を引っ張ることはないと思うのです。ところが、宗教の名において社会の悪を正そうとする人の足を引っ張る人がいるのです。

もっと言えば、そういう現実社会の悪を正そうとするようなことは思いついたことであって、宗教というのはそういう世界にはないんだ、あるいは、娑婆は、戦争であろうが、平和であろうが、そんなこととはお構いなしに念仏を喜ばいいんだというような説き方をされる方もいらっしゃる。それはやはりどこかで間違っておられるでしょう。

私はこれからの念仏というものは、こういう同じ社会に生きている人たちの苦しみに目をつぶるものであってはならないと思います。もっと言えば、念仏をするということは、阿弥陀仏の事業に参加することでありまう。

念仏をするということは阿弥陀仏の事業に参加すること。つまり、阿弥陀仏がなされようとしていることに私たちもお手伝いをして、仏の道を歩むわけです。阿弥陀さんがなされようとしている一番大きなことは、「我が名を呼べ」という仏になる道をたくさんの人に伝えてほしいということが一つです。

現実には阿弥陀さんと縁を結べない人間もいるし、念仏をしてももう一つピンと来ない人間もいる。これは人間のほうが問題なんです。阿弥陀さんの目から見ればすべては仏になることが決まっている。ただ、それを自覚できるか、できないか。それは人によって遅

い、早いがあるのです。

この世で自覚できなかった人は、また流転の輪廻を経て再び人間として生まれてきて、また仏教と出会って、そして、そのとき運がよければお念仏できるようになるということです。念仏は自分が称える前に「聞く」ということが大事です。人様が念仏しておられるのを聞くということが先なんです。だから、自分で念仏がなかなか出にくいという人は、人様が念仏しておられるのを聞きになることです。聞いていると、自然と自分も念仏できようになるものです。

このように、阿弥陀さんの目から見ればすべては仏になることが定まっているが、人間一人一人はそのことを自覚するのは、縁が働かなければしょうがないわけです。

私は、念仏あるいは宗教というものは、個人の心の問題を解決するだけのことだというふうに、個人の心に閉じ込めてしまったのは、これは明治国家の宗教政策の残骸だと思っています。

「明治国家」というのは、天皇崇拜によって成り立っていますから、天皇崇拜を危うくするような宗教は全部否定してきたわけです。弾圧してきました。それでも、宗教的要求はありますから、その宗教的要求に応えるために、個人の心の悩みを解決するのが宗教だと教えてきたわけです。

個人は私事である。社会の問題に口を出すのは宗教ではないと、明治以来、国家はあらゆる機関を通じてずっと宣伝し続けてきた。そして、そのことに迎合することで教団は存続してきたわけです。

しかし、そうすることによって念仏は死んでしまったわけです。もう死ぬに等しい状態になってしまった。そういう中でたまに、先ほど言った林靈法さんとか高木顯明さんといった阿彌陀仏の慈悲が伝わりやすい体質の人がおられて、いろいろ頑張ってくださったのです。私たちの体質はいい体質ではないので、なかなか人様に慈悲を施すほどの動きはないかもしれないけれども、念仏というものは我が身一つのことではなくて、この同時代を生きている人々のために存在している。そういうことを絶対に忘れてはならないと思います。

実際、念仏しているとそうなりますよ。念仏していても「自分だけ」のことというのは、なかなかないですね。必ず他人のことが気になるものだと思います。

ですから、私は『歎異抄』は法然上人のご法語集だと思います。その中の言葉で「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと」、「よろづのこと」ですよ。もう一切合切ということですよ。「よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」という言葉があります。あるように見えるけれども、いかにそれがはかないものか。「よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに」。これは少し経験を積んできた人間ならば、そのとおりだと言わざるを得ない。それが人間世界です。そういう中で法然上人の念仏は「念仏のみぞまことにおはします」と。もう全部がよろづのこと、そらごとたはごと、まことあることではないのに、念仏だけがまことだと言い切っておられた。

私は、この現実の世界、「よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに」ということについては、割と早い時期から了解できたけれども、「ただ念仏のみぞまことにておはします」という言葉が本当に身にしみてわかるには時間がかかりました。

それは先ほど申し上げたように、念仏が自分の行為だと思っていたからわからなかったのです。念仏は私の口から出る私の行為であるけれども、それは阿弥陀仏の行為であるというところに気がついた途端に、「ああ、それは当然」だと。念仏は仏様の行為なんだから、「念仏のみぞまことにしておはします」というのは当たり前のことではないかと思えるようになったわけですね。

この法然上人の念仏というものは、十三世紀で終わるものではありません。これからなんです。私から言わせれば、浄土仏教、法然さんの仏教はまだまだ進化していきます。どこに向かって進化していくかという点、今、申し上げた社会に広がっていくのです。念仏を根拠に社会に広がっていく。

つまり、念仏は阿弥陀仏の事業を實踐することであり、この阿弥陀仏の事業は浄土においては完成しているけれども、人間社会においては完成していません。人間社会の悲願がすべて人間社会の中で実現するかというと、それはもうほとんど絶望的です。

絶望的だけれども、その中でも少しずつ、少しずつ何か実践していく。実現するかどうかはわからないけれども、実践していく。なぜそういうことを言うかという点、その「実践」、そのような人間の悲願の実現に向けて実践していくことが、人間の一番の生きがいだからです。

「人間の生きがい」というのは、もうそれ以外ないです。これは実現しないとわかっていても、それに向かって努力していくのが人間の生き方なんです。人間が最も充実したと感じる生き方なんです。

(一)

阿満利庵(あま・としまろ)

明治学院大学名誉教授(2006年4月から)

仏教雑誌『連続無窮』主宰

『法然の衝撃』『法然を読む』著者

近著『數異抄—注解・現代語訳・解説』(ちくま学芸文庫)(2009年5月刊行)

寺院紀行

東京・尾久

満光寺

撮影／タカオ力邦彦

文／真山剛



鮮やかな朱色で塗られた満光寺山門。

「実にまじめで良い学生でしたよ」と、阿川文正台下は大正大学仏教学部浄土学時代の高田昭仁満光寺住職のことを振り返る。阿川台下は、福岡県の久留米にある浄土宗大本山善導寺の法主だが、この二月に東京赤坂にある自分のお寺に戻った時に、高田住職の挨拶の訪問を受けたという。「この春の増上寺の御忌で唱導師を務めることになりました」と、かつて法然上人の教えに導いてくれた恩師への報告の挨拶だった。

さて、御忌とは浄土宗を開かれた法然上人の年忌法要で、浄土宗の各寺院でも行われるが、中でも総大本山の御忌法要は特別で、法主と呼ばれる大本山の住職の代わりに導師を務めることができ、浄土宗僧侶にとっては一世一代の晴れ舞台だという。

「高田三代の百年に亘る信用がこの務めを支えてくれる。先代、先々代のためにも唱導師を務めあげたい」

四月六日の増上寺御忌唱導師を務める満光寺高田昭仁住職はこんな特別な思いで、その日を迎える。というのも、平成二十三年に法然上人の八百年の遠忌法要を迎える浄土宗。満光寺でも記念行事を行っているが、その一環として増上寺の御忌唱導師を檀家さんから勧められたからである。

高田住職が第二十九世となる満光寺は東京荒川区東尾久にある古刹で、南北朝から室町時代にかけて天台宗の寺院として上野の不忍



満光寺には昔からの二葉地蔵、二羽稲荷、二葉閻魔の三つからなる二葉講が残っている。写真の左が閻魔堂、右が稲荷大明神。

池近くに創建された。その後、慶長年間に逝去した二葉氏の歆喜院殿前泉州守満譽光榮受信大居士が大檀那となり、同じく慶長年間に遷化された實譽智天上人を開山とし浄土宗寺院になった。そして上野寛永寺建立に伴って寛永三年に現在地に移転した。移転先の尾久は大正初めに荒川放水路ができるまで度重なる洪水に見舞われ、残念ながら創建当時の記録は現存していない。手掛かりとなるのは開基二葉氏の墓碑の刻文だが、その刻文を記録したのが明治四十一年に満光寺に入り、高田三代の礎を築いた高田隆光師で、その記録には当時の荒廃していた様子が克明に記されている。

——当寺は荒廃の極みに達していて、壁は落ち、軒が傾き、畳は破れ、七間六間半の萱葺き本堂の天井は損壊し、井戸も大破していた。まるで狐や狸の棲家と疑うほどだった——。

この荒れ果てていた寺を隆光師は浄土宗宗務庁に勤務しながら、当時四十余軒だった檀家を訪問しては情に訴え、菩提寺復興を懇願し続けた。その努力が実り、檀家への寄付金募集にこぎつけ、一千有余円の浄財で、復興が始まった。新生満光寺の第一歩である。

その後も昭和二十年代まで、檀家からの浄財寄付で伽藍や庫裡を少しずつ整備してきた様子が克明に記されているが、行間から隆光師の苦勞がにじみ出ている。

その隆光師の後を継いだのが、息子の隆成前住職である。昭和二

平成二十三年に迎える法然上人八百年大遠忌の記念事業として整備された庭園と東屋。夏にはここに堂が放たれる。



十三年に第二十八世住職となり、昭和五十六年に遷化^{せんげ}されるまで法灯を継承した隆成前住職は、満光寺をさらに整備、本堂の再建や墓地の整備、各種お堂の復興などを行い、檀家さんも四百軒に増やした。同時に荒川区の文化や歴史、教育と深く関わってこきた。

ここに『郷土あらかわを語る』という本がある。隆成前住職が遷化した二年後に荒川史談会から発行された自費出版の本だ。荒川史談会とは「郷土愛の涵養と郷土文化の向上につとめることを目的に活動する」会で、昭和四十一年、高田隆成前住職が初代会長となって結成された地元の有志の会である。その高田会長の老人教養講座で「あらかわの史蹟と文化財をたずねる」と題した講演と、荒川史談会が発足当時から現在まで発行し続けている月刊の郷土史新聞『荒川史談』連載の「古老に聞く」を加えたのが『郷土あらかわを語る』である。

高田会長の講演原稿を読むと、その語り口の柔らかさ、そして何より生まれ育った地元の歴史を述べながらも、客観的かつ物事を俯瞰してみることができるといえるのが、実によく伝わってくる。その人間性を端的に表しているのが、隆成前住職が整備した満光寺の歴代住職墓である。

この寺院紀行で訪れたお寺の数も百を越えたが、満光寺の歴代住職の墓には本当に驚かされた。本堂の左手に墓地が広がるが、その入口のすぐ右手最前列の一番手前、中央通路のすぐ脇に歴代住職墓



編旨と一緒にいただいた奉書。この他に知恩院からの添え状も残っている。正徳元年11月1日の日付となっている。

満光寺第24世となる慶譽檀戒上人が千葉県検見川善勝寺に住持していた頃の香衣被着的の編旨が残っている。



があり、その横に開基二葉家の墓、そして高田家の墓、その隣から一般の檀家さんの墓が並んでいる。歴代住職墓も二葉家の墓も高田家の墓も、一般の檀家の墓も広さも大きさもみな同じなのである。

お坊さんの墓が卵塔という丸い形と知っているから歴代墓と気付いたが、知らない人が探しても見つからないに違いない。どこのお寺でも歴代墓は広かったり、墓地の一番良い場所にあったり、あるいは檀家さんの墓と離れた特別な場所にあったりするのが一般的だからだ。昭和二十五年に隆成前住職がこうした形で整備したのだが、このお墓ひとつを見てもその人生観が伺える。

昭仁住職が先代のこんな言葉を思い出してくれた。

「すべてに平等、そして物事を正しく見る」

こう語った先代は民生委員や保護司、青少年委員、PTA連合会長を始め、荒川区の多くの要職を歴任されてきたという。だが、その背景には先々代の隆光師が方面委員（現在の民生委員）時代に親しくお付き合いした後輩が、区の要職に就く中で、その恩返しのためにと、何かと息子さんである隆成前住職を引き立ててきたこともあったからだという。つまり、高田家はお寺とともに地元を大切にしているのだが、その伝統は隆成前住職から昭仁住職へも引き継がれている。だが、その前に二人の面白い出会いの話をしよう。

実は昭仁住職は、以前本誌に登場いただいた東京四谷の西念寺の

墓地入口に並ぶ歴代住職の墓（左）と開基二葉家の墓。



三人兄弟の次男として昭和二十三年に生まれている。西念寺の西嶋義彦前住職と満光寺の高田隆成前住職は大正大学の同期生。それが昭和四十四年暮れの増上寺での東京仏青の成道会で偶然再会する。そこで、西嶋上人の長男が自動車のセールスマンをしていて、荒川区を担当していることを知る。君の長男から車を買おうということになり、翌年一月に車が納車された。

二月から昭仁住職は浄土宗僧侶になる最終道場の加行けぎょうを増上寺で受けている。大正大学三年の時だ。その加行期間中に、隆成前住職が知り合いのお寺の息子じこさんの成満じょうまん（加行を無事修了すること）祝いを用意した。すると、西嶋上人の次男も加行を受けていることに気付く。そこで、ついでお祝いを置いていったのだそう。

昭仁住職にしてみれば、面識もない方からのお祝い。聞けば父の知り合いだが、それにしてもお祝いをもらったからには御礼は欠かせない。三月半ば、無事加行を成満し、東尾久の満光寺を訪れた。

普段は不在がちな隆成前住職が、たまたまお寺にいた。

わざわざ来てくれたのだから、まあ、あがつてお茶でも飲んでいきなさい、となる。もとより面識もなく、父の関係だけに昭仁住職は玄関で帰るつもりだった。が、大学も春休みで時間があつたので、上がり込むこととなった。そして、雑談となったのだが、二人のお寺やお坊さんに対する考え方が実によく合った。玄関で挨拶を済ませ



先代が整備した墓地だが、水が出たことから現住職が平成三年から三年かけて整備しなおしている。

る予定が意気投合、隆成前住職が春の彼岸にうちの手伝いをしないかと聞いてきた。まさに加行を終え僧侶になり立ての昭仁住職、立派な僧侶を目指そうとする矢先の誘いだけに喜んで引き受け、二十余軒の檀家さんの家をまわった。各家の地図を渡されたものの不案内な土地、お昼には満光寺に戻れず町屋の駅前交番で寺に戻る道を尋ねた。そしてようやく満光寺に戻ったのは、もうお昼も大分過ぎた頃。そこに長女的美佐子さんがお昼を用意して待っていてくれた。そこは若い二人、何とはなしに意識し、会話も交わすことになる。

隆成前住職、長男を高校生の時に亡くしていることもあったが、自分と考え方が合う昭仁住職を大いに気に入った。そこで、次男である昭仁住職の将来像を聞くと、「僕はまだちゃんとした僧侶の実践も積んでいないので、もう少し修行して一人前になってから婿に行くつもりです」と答えた。そこで「いずれ西念寺を出て、どこかの寺に入るのなら、最初からそのやり方を覚える方がいい」、そして「うちはどうだ」と口説いてしまう。もちろんお嬢さんにも好意を持っていた昭仁住職、満光寺に養子に入ることを決めた。

あとは、トントン拍子。五月に結納を交わし、翌昭和四十六年の一月からは満光寺の職員として給料ももらい、卒業前の二月には満光寺の阿弥陀さまの前で仏前結婚式が行われた。

そんなこんなで、大学四年の終わりからは隆成前住職の手伝いを

本堂下の客殿（開山堂）。正面奥に開山上人像、その手前に勢至菩薩像、そして両脇に善導大師像と法然上人像が祀られている。



することになる。先々代の頃から地元の各種会合に場所を提供している満光寺、手伝いはいくらでもある。庭掃除に準備や後片付け、さらに法要の手伝い、そして『荒川史談』の校正や表紙の写真撮影までも手伝った。こうした中で、昭仁住職に二代続いてきた高田イズムが自然とすり込まれていく。

隆成前住職は六十一歳という若さで遷化された。昭仁住職が満光寺に入ってから十一年後の昭和五十六年だった。以来、昭仁住職は先代から引き継いだ荒川史談会の第五代会長をはじめ、荒川区の文化財保護推進委員、文化団体連盟理事長、地域振興公社評議員、教育委員会教育委員長などを歴任、東京都から文化功労表彰、文部科学大臣から地域文化功労表彰を受けるなど、先々代、先代に勝ることも劣らず地域の発展に尽くしてきた。

『地元で生きろ、寺はきれいにしろ』という先代の言葉を、私なりの考え方で実践してきました。先代、先々代が守ってきた法灯を慕ってきてくれたお檀家や、町の人たちのおかげで唱導師を務められます。高田三代、百年の信用に支えられての唱導師なのです」

明るく陽気でいつも笑顔の住職が、すこし緊張されながら、特別な思いを語ってくれた。そして、最後にこうつけ加えられた。

「明るい地域の喜んで住める町、その真ん中にあるホットするお寺。これからもそんな寺を目指していきます」

(ルポライター)

本堂から境内を臨む。いまでも縁日が開かれているが、以前は節分の豆がまかれていた。



連載

会いたい 関 容子 人

平幹朗

さん

③



撮影／タカオカ邦彦

平さんの演劇人生に大きな影響を与えた演出家と言えば、やはり浅利慶太と蜷川幸雄の二人だろう。

「ぼくにとつて恩人と言えるのは、浅利さんですね。『アンドロマック』に出たことで『ハムレット』に抜擢をしてくれて、それから七年間、日生劇場で主役をやらせてもらったので世間的にも主演俳優としてのポジションが定まったし、ずいぶんいろんなことを教わりました。もし浅利さんに出会わなかったら、ずっと新劇にいたかもしれないし、その後の多方面への広がり方はなかったかもしれない。浅利さんにはまずせりふをクリアーに朗唱することをきびしく言われました。感情のままに、舞台を駆け回って取り乱した演じ方をするんじゃないくて、ちゃんとコントロールして、スツクと立って、粒立ったせりふを言う、というやり方を要求される。俳優座で生活感とかリアリティを大事にするせりふを勉強してきたあとだったので、青写真を頭

の中に持つて構築されてる世界を展開していくせりふ術というのを、浅利さんがきびしく求めていた時代なので、すごく勉強になったし、育てられたとも言えるんです」

平さんがそのころ越路吹雪と共演したミュージカル『結婚物語』は、当時ずいぶん話題になった。特に、主演の二人が舞台でメークを公開し、だんだん老けてゆくところが斬新な趣向の見せ場だった。

「ああ、あれは『ハムレット』のときに、ぼくが楽屋で発声練習を兼ねてシャンソンが何か大声で歌ってたんですね。それを聞いたオフィーリア役の影万里江さん、当時の浅利夫人ですが、平さん結構歌えるわよ、って浅利さんに言ったらしい。それで『結婚物語』に出ることになりました。しかし困ったのは、オーケストラがオケピットにいないで、ステージの後ろの斜幕の向うにいて、指揮者が見えないわけなんです。特にワルツの曲は歌い出しがつかめなくて苦労したら、そこ



「結婚物語」で越路吹雪さんと共演する平幹二郎さん(昭和44年)。

は越路さんとぼくはベッドに並んで正面向いて座ってるんですが、ぼくの背中をボンと叩いてキツカケを教えてくださいたんで助かりました」

では、伝説化している越路吹雪が出の前にとても緊張する、というのは実際にはどうなのだろう。

「彼女はああダメ、今日はダメ、あたし死んじゃう、つてずつと言ってます。朝から言ってますから本当にそんな気がするんでしょうね。若い男の子の付人に肩貸してもらって、舞台の袖までそんな調子で行って、幕が上がればもう堂々たるものでした（笑）」

劇団四季がだんだんとミュージカル路線になってきたころ、平さんと蛭川幸雄との出会いがあった。

「もつとほかのミュージカルにも越路さんと出ないかという話をいただいたんですが、ぼくは歌も踊りも素人だし、いずれは本格的に

勉強してきた人たちに追い越されることは予想できましたから、ここで苦勞しても置いてかれる、と思っただんです。そんなとき（昭和五十一年）、三島由紀夫の『近代能楽集／卒塔婆小町』に、蛭川さんの演出で、という話があつて出演しました。夕暮れの公園で醜い老婆が若い詩人に自分の過去を話すうちに、いつしか昔の美女に立ち帰る、というところは、口調を変えて背筋をスツと伸ばすだけで、みんなから一瞬きれいに見えた、つて言われましたけどね（笑）」

蛭川・平コンビの話題作は、何と言つても平さんが強烈な女役を演じて世間をアツと言わせた『王女メディア』だろう。しかし蛭川演出の第一作が卒塔婆小町でこれが「女方」だった、というのも因縁が深そうだ。

「ぼくが『王女メディア』を演じたキツカケは、『マクベス』で玉三郎さんと共演したことなんです。ぼくがマクベスを演じながら客席を見ると、前列の客がみんなぼくの芝居

を見ないで玉三郎さんのマクベス夫人を見つめてるんですよ。そうか、ジェンダー（性）を変えて演ずると、人の好奇の眼はそっちへ向くものなんだ、と思った。そのころちょうど、いろんな役をもらって無難にこなしているだけでは壁に突き当るな、と感じ始めていたので、そうだ、女を演じれば、歩くことにしても手を上げることでも、全部意識してやらなきゃならない。男を演じるときはそういうことはあまり考えてないな、と思って、蜷川さんに自分から『メディア』を演じたい、って言い出したんです。すると、その身体でどうやって女を演るの？ って……」

平さんはそれには衣裳が一番大切と考えて、研究を始める。するとある日、辻村ジュサブローさんの人形の写真集を見つけてハッとした。

『ルクレチア・ボルジア』のヒロインの、押し絵の壁掛みたいなものなんですけど、オッパイを大きくむき出しにして、鷲のような

爪の手をこう広げてこっちを睨みつけてる。これならぼくにも女が演じられるんじゃないか。すぐ蜷川さんとプロデューサーの了解を得て、ジュサブローさんを訪ねました。即座に引き受けてくれて、次に訪ねたときはもうあの恐るべき衣裳ができてました（笑）」

肌色の縮緬でできた巨大な乳房つきの豪華衣裳をまとった平さんの『メディア』の写真。あのころ新聞雑誌の紙面に度々登場して圧倒されたものだった。

「舞台には何かマジックがあるほうがいいんですよ。乗り越えなきゃいけないギャップがあつて、それを乗り越えることがパワーになる。だからそれが困難であればあるほどいいんですよね」

『メディア』はオペラではマリア・カラスの当り役で、不実な夫への復讐のために夫との間に設けた二人の王子を殺す気性の激しい女。「その不実な夫役を三国連太郎さんにお願ひしたんです。ところが前の仕事があつて、稽

古に入ってこられるのが十日後だった。蜷川さんも野心満々の時代だったから、今もそうだけど（笑）、三国さんが入ってきてびっくりして、よし負けないぞ、と思わせるために、彼が登場する幕あきから三十分後までをちゃんと作り上げてしまおう、ということになって、そうしたわけなんです。三国さんにそこまでお見せして、ハイどうぞ、って。それから翌日から三国さんが入院して、役を降りてしまわれた。それがとても残念でした」

平さんは念願だった三国連太郎との共演のちになって『心中沖也節』という芝居で果たした。

「東宝の芝居で、山本周五郎さんの『虚空遍歴』という小説を菊田一夫さんが脚色されたんです。地味であまり当りませんでしたけどね。狂人的な絵師の役が三国さんで、ぼくは常磐津の三味線弾きの役でした。二人で会話を交わすシーンがあつて、嬉しかったです」

蜷川幸雄との間に誤解が生じたのは、平さんの病気が原因だった。『王女メディア』と『マクベス』の二本の主役を同じ一人の俳優が演じるという画期的な演し物を持って、ロンドンのナショナルシアターに乗りこみ、世界に勝負を挑もうというその三か月前、平さんは病気になって役を降りてしまった。

「それまでも『メディア』はギリシャやニューヨークの野外劇場で、『マクベス』もオランダやエジンバラで演って評判を得てきましたけど、ロンドンの最も権威ある劇場は、世界の檜舞台ですからね。これが世界の二ナガワのパスポートになるわけですから、今さうなで逃げるんだ、と怒ったわけです。ぼくは肺がんということ公表しなかったの、蜷川さんにも言いませんでした。結局メディアは歌舞伎の女方の嵐徳三郎さん、マクベスは津嘉山正種さんが演じて、一人の俳優が女と男を演じ分けるという蜷川さんの意図の一つを生かせなかった。それでぼくのほう

『近代能楽集／卒塔婆小町』で
“女”を演じる平幹二朗さん(昭
和51年)。



は手術が成功して、半年後にはもうテレビに出てるのに、あの約束を守らなかった、というわけでしょうか。でも、自分があのときかくしたことだから背負わなきゃいけないと思って、実は、と行いに行かなかった。その後、彼は『近松心中物語』や僕が主演した多くの作品をつぎつぎと若い俳優にやらせました」

平さんは自分の持ち役をほかの役者が演じるのを、いつさい観に行かなかった。

「汚い心で観るといけませんから。きつと自分のほうがいいと思うだろうから悪いところばかり探すと思うんです。それはいやですからね。俳優はいつでも共演することになるかわからない。そのときわだかまりを持つ

てるといけませんからね」

蜷川幸雄と仲直りができたときは、決別から十年の月日がたっていた。

「テレビの『波乱万丈』という番組に出たとき、病後十年で再発も転移もないとわかったころだったので、良性腫瘍じゃなくて、実は肺がんでした、とボロツと言ってしまったんです。それで蜷川さんも知ったわけですね。また一緒にやろうよ、ということになりましたから」

そして蜷川演出の『グリークス』（平成十二年）『リア王』（平成二十年）は、高い評価を受ける。ところで噂に聞く蜷川さんの演出ぶりは実際はどんなのだろうか。

「ぼくにはダメは出しませんね。やりたい放題やらせてくれて、もって音楽を過激にするとか、向うが合わせてくれる。以前、『近松心中』のときは、心中した梅川の死骸を逆さに抱いて雪の野原をさまよいたい、とぼくが言い出したら、すぐ喜んで採用しました。

それで、忠兵衛は養子の身分で孤独な男だから最初の出は猫を抱いて出たい、って言ったら、そりやどうかあ、ってこれは却下でした。本筋から外れるからでしょうね。でも最終稽古が終って、ほっとしていると、やって来て、感動しねえんだよなあ、と言ったりする。こつちをうまくふるい立たせるつもりなんでしょうね。でも彼はぼくの三つ年下で、ぼくよりも素直ですから、感動するとウルウルしたりして、可愛いところもあります（笑）」

つまり、蜷川さんは昔から平さんに一目も二目も置いているのだろう。

平さんが長年主宰する「幹の会」の活動も活発で、今年一月から初夏まで、『冬のライオン』（ジェームズ・ゴールドマン）のヘンリー二世役で全国を巡演。大いに気を吐いている。

私は一月の東京グローブ座の公演を観たが、劇団四季のころの若い平さんを彷彿させる熱のこもった舞台は素晴しかった。（おわり）

設し我れ仏を得たらんに、國中の人天、悉く真金色ならずんば正
覺を取らじ。

（『無量寿經』第三悉皆金色願）

私が仏となる以上、私の国土に住む天人や人々が、みな金色に輝いていないこ
とが、万が一にもあるようならば、その間、私は仏となるわけにはいかない。

いつか輝く

「バンクーバーのオリンピックピックっていつから？」という私に、二月の早々、あるお檀家さんから電話があった。毎月、先代のおばあちゃんの月命日にお参りに行くお宅の御主人だ。いつも夕方に参上し、読経の後、夕飯をご馳走になる。「あさってのお参りなんだけどさ、少し早めに来てくれる？ その晩、オリンピック選手の壮行会に行くんだよ。いとこの娘なんだけど呼ばれちゃってさ」

「あ、そう。忙しいんだね。それじゃ、お経だけにしとくよ」

「いや、そうじゃないんだよ。若、そのまま一緒に行ってくれないか」
親戚のそのまた親戚の菩提寺なんて場違いもいいとこだろうと思って、はじめは尻込みをした。でも昔から私のことを「若」と呼んで可愛がってくれる御主人のこと。結局、同行してみることにになった。

会場は長野駅前のホテル。聞けば後援会長と親類だけが集まるささやかな会だという。われわれは受付が開く前に到着したが、件のご主人は会場内で席札を置く関係者たちと気軽に挨拶を交わし私を紹介してくれた。関係者だと私が思っていたのは選手のご家族とオリンピック日本選手団のスーツを身に着けた「いとこの娘」その人だった。彼女の名は原田窓香。女子一人乗りリユージュの代表だ。

名前だけは昔から知っていた。長野オリンピックの後、長野に将来のメダリストを目指してリージュを始めた女の子がいると地元メディアが取り上げていたのだ。前回トリノ大会に出場して十三位。今回は入賞を狙う。

世界を相手に、学生のまま一途に競技を続ける彼女にとって物心ともに頼れるのはやはり親類なのだろう。そんな彼女を親類総出で温かく見守る宴は地味かも知れないが、リラックスした、じつにいい雰囲気だった。

宴も進んだところで、何故か私にスピーチが回ってきた。驚いたが、そこは壮行の会。まずは縁起をかついで金色のお袈裟をかけてきたと自己紹介。そして数ある色の中で金色が一番尊い色であること、仏さまが金色であるのは覚りという最高の境地に達している証であることを紹介し、もちろん目標は金メダルではあるけれども、競技者として最高の境地を味わってきてほしいと激励した。

もつとも技を競い優劣をつけるのが「競技」である。負ければ悔しいし、上手いかなければ自分に納得できない。だから少しでも上を目指して鍛練を重ねるのだ。そして、最後、後悔のかけらも残らない究極がオリンピックの金メダルなのだろう。とはいえ、その金メダルは競技の数しかない。競技であれば

こそ大多数が涙を飲むしかない。でも、だからこそ金メダルは輝きを放つ。

原田選手のバンクーバーは前回トリノの順位を大きく下回った。にわか応援団の私でも残念でならないが、二月になるまでバンクーバーの開幕がいつだか知らなかった私が彼女のために必勝祈願をし、衛星放送の中継録画に映る彼女を応援したのは事実。今はただ「ごくろうさまでした」としか言えないが、こちらこそ一途な人を応援する喜びを味わせていただいた。

ところで、阿弥陀さまの極楽浄土に往生した者は誰もがみな金色に輝いているという。仏さま方や菩薩さま方と同じ色だ。教理的に言えば、極楽に往生すれば覺りの世界の一員になるということの一つの証と見ることができる。

でも、私は思うのだ。阿弥陀さまは私たちがいとおいしいのだ。幸せになろうとしてもどこか欠けてしまう私たちの人生がいとおいしいのだ。だから「人の一生って、なかなか納得いかないもの。でも、これまで君は頑張ってきたんだよ。君が本当に輝くのはこれからなんだよ」と私たちを極楽に迎えて下さるのだ。

デコボコでもいいから生きてみよう。極楽往生がなかった時、きっと金色に輝く。おのおの味わい深い輝きで。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

花まつりの由来 佐々木美冬



四月八日の花まつりは釈尊の降誕を御祝いする行事です。

それまで、灌仏会、浴仏会、仏誕会、龍華会、花会式など、さまざまな呼称があったのですが、「花まつり」と呼ぶようになったのは、明治以降、陰暦からグレオリ才暦に変わってからの四月初頭が、関東の桜満開の季節と重なることから、浄土宗がこれを採用し、他が追従したことに発します。

わが国では『日本書紀』推古天皇十四（六〇六）年夏の条に

「銅、繡の丈六の仏像、並びに造りまつり竟りぬ。是の日に丈六の銅の像を元興寺（飛鳥寺）の金堂に坐せしむ。」とあり、

「即日、設齋す。会集へる人衆、勝げて数ふべからず、是年より初めて寺毎に、四月の八日、七月の十五日に設齋す」

と、あることから、これが仏生会の嚆矢と

されます。

その後、承和七（八四〇）年、静安律師が宮中清涼殿で初めて灌仏会を営み、以来、宮中行事として催されるようになります。

『源氏物語』の「藤の裏葉」には、

「灌仏ゐてたてまつりて、御導師、おそくまゐりければ、御方くより、わらはべいだし、布施など、おほやけさまに交らず、心くにしたまへり」

と、あり、平安中期には定着していたことがわかります。

時代が下って、後醍醐天皇撰『建武年中行事』には、

「（四月）八日、灌仏あり。神事にあたる年はなし。灌仏あるをりは、九日より御神事なり」とあることから、神事との兼ね合いで行われていた様子がみてとれるのも興味深いこ

とであります。天保九（一八三八）年の『東都歳時記』には、

「諸寺院勤行あり。本堂又は境内に花の堂を設け、銅像の釈迦仏を安じ、参詣の諸人に柄杓を以て香水を仏頂にそそぎ奉る」

と、あり、江戸時代にいたっては多くの寺院で花まつりが行われ、民間に浸透していたことがうかがわれます。

花の堂とはルンビニの花園になぞらえた「花御堂」。香水とは釈迦誕生の際、竜王の提供した産湯伝説、五色の甘露の現出伝説による「甘茶」そして、銅像の釈迦仏とは誕生仏の立像。

花と光のなか、小さな子どもたちが列を作り、柄杓を持ち、伸びあがって、誕生仏に甘茶をかける姿は、春ののどかな風景として、心の郷愁を誘うものであります。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第十三回

異色の外交官・
寺崎太郎 その2



西光寺は国際テンプルにして 国際的大使館

戦前の駐英時代の回想にふけているうちに、気がつくと、ラジオドラマはふたたび寺崎を「おや」と思わせる新しい展開をみせはじめた。そして、今度の「おや」は消えるどころか、新しい発見へとつながるものだった。渡辺海旭は十一年間のドイツ留学を終えて帰国すると、留学前から住職をつとめていた深川の西光寺に居を定めた。すると、海旭の後を追って来日し、西光寺で起居をともにしながら研究をきわめる者がつづいた。ラジオドラマでは、

「こうしてこの世界的仏教学者のもとへは、世界各国の仏教徒が集って、ドイツのニヤナ・チロカ、バツポーの二氏の如きは、八年間も、その会下（えか）に参じ、その他英国、インド、ロシア、フランス各国の仏教学徒が、日本を訪れて、まず足を向けるのは深川の海

旭のもとでありました」

と語られてから、カイゼル（ドイツ皇帝）の遠縁にあたるエルゼ・ブーツロフ嬢が、弟子になりたいと西光寺へ押しかけて海旭を大いに悩ませるエピソードへと展開していった。

寺崎はにわかに興味を覚えて、耳をそばだてると、内心でつぶやいていた。海旭の西光寺は国際テンプルではないか、いや寺（テンブル）というよりもこれは大使館（エンバッシ）だ。見方によっては、海旭は自分とおなじ外交官でもあったのではないかと。これは実に新鮮な発見で、海旭が急に身近に思われてきた。

西光寺に身をよせ相談に訪れたのは、僧侶や仏教研究者だけではなくた。インド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボースや前駐日ドイツ大使ウイリヘルム・ゾルホ、駐日英国大使チールズ・エリオット、ソルボンヌ大学教授レヴィ、第一高等学校教授ベッツオルト、

ロシアの漢字研究者のオットー・ローゼンベルク、書画家で孫文の辛亥革命の援助者でもある王一亭らなど激動の昭和史を彩る多士濟々ぶり。まさに寺崎が「発見」したように、西光寺は国際的大使館で海旭はその「特命全權大使」であった。

海旭が帰国したのは明治四三年（一九一〇）、乞われて国際テンブル・西光寺住職と芝中学校長を兼務するのは、翌明治四四年。そのとき寺崎は芝中二年生。海旭の週一回の修身の授業を聞かされるにつけ、海旭のことを「抹香くさい」と敬して遠ざけてきたが、これほど華々しい外交活動を展開していたとはつゆも知らなかった。

ついで、ラジオドラマは、インド人亡命者、アタールの自殺とそれをめぐる海旭の関わりへと転じた。ここにいたって寺崎の海旭にたいする新しい「発見」は「確信」へと変わった。すなわち海旭は「外交官の鑑」ではないのかと。

事件がおきたのは大正一〇年（一九二一）六月、寺崎は外交官試験に受かった年でもあり、日本・インド・英国の国際関係が背景にあったことから職務的に関心をもちよく覚えていた。アタールは東京外国語学校（現・東京外国語大学）のウルドゥー語教師で、英人総督を襲撃して日本に亡命していたインド独立運動の志士ボースの同志だった。当時日本は英国と同盟関係にあったことからアタールは日本政府から厳しい追及をうけて進退窮まったのではないかと推察された。

海旭がこの一件にこれほど深くかわつていたとは、寺崎は知らなかった。ドラマによると、厄介な国際関係に「配慮」してか、通夜に訪れる友人もまばらで、翌日の葬儀も危ぶまれた。通夜の席に連なっていた海旭は、自らが導師を引き受け、費用を一切負担。それだけでなく遺骨を故国のインドの遺族へ届けると申し立て、それを実行したのである。寺崎は驚いた。これは僧侶としての「対応」

をはるかに超えている。外交官の、それも優れた外交官のなせるわざではないか。外交は引いていてばかりではだめだ、主張すべきは断固として主張する。当時駆け出しの外交官として寺崎が知りえた情報では、海旭の断固たる対応によって海旭自身とその周辺に危険が及ぶことはなかった。インド独立運動の首魁であるボースへの追及も日英関係もこれで悪化することはなかった。つまり一見暴挙にみえた海旭の断固たる「外交的対処」は奏功したのである。見事なものだと寺崎は改めて感じ入った。

日米決戦の運命の子、 マリコ・テラサキ

外交とは虎の威をかりて時流におもねることではないし、そうであつたら国を誤る。戦前は多くの外務省の同僚や部下どもは、枢軸派の松岡洋右という虎の威を借りて肩で風をきって国を誤らせたが、その同じ連中が敗戦

後は英米派の吉田茂にすりよる右顧左眄・阿諛追従ぶりをいやというほど思い知らされた寺崎には、海旭の時流におもねらぬ果断さはまさに尊崇にあたいするものだった。

それでは「外交官はだし」の海旭にくらべて「玄人外交官」の自分はどうだったか。そう自問してわが外交人生をふりかえった。外務省首脳がどういおうとも日米開戦をなんとしても阻止するのが国益だ、そのために自分の進退を賭したことに毫ほどの悔いはなかった。自身だけではない、親兄弟、一族の生活、いや生命さえかけた。その象徴的な存在が弟・英成の長女マリコだった。

それにしてもマリコには不憫なことをした、外交官とはなんと因果な商売なのかと寺崎はつぶやいて、ふーっとため息をついた。

兄・太郎の後をおって外交官になった弟・英成は、昭和六年（一九三一）、アメリカに赴任、日本大使館のパーティでグレン・ハロルドと知り合い恋に落ちた。すでに日米の緊

金光明經の梵文は一八九八、九に於て（一）の公刊、その後、句讀、批註、大分は出版、其の他、再刊、要するに、句讀、批註、大分は、引用、必要、なり。

チ

भूतं यथैतत्तस्यै तत्प्रकृते तत्प्रकृतिः।
विनाशाय यथायति तथीते बुद्धजोमतिः।
तेन बुद्धजोमतिः विनाशायै यथायति यथायति
यथायति विनाशायै यथायति यथायति यथायति

再、此、佛、像、を、下、種、常、無、常、山、の、邊、に、枝、本、を、入、り、て、
此、に、二、三、回、を、本、に、入、り、て、入、り、て、
機、を、傳、に、ロ、ン、ト、キ、に、入、り、て、M、を、見、て、更、に、
丁、本、を、入、り、て、

君、が、ハ、ル、に、は、達、な、な、エ、ト、モ、ハ、ル、に、
サ、一、度、の、う、ち、が、大、切、な、事、を、承、知、せ、り、
度、に、な、す、地、邊、の、官、廳、に、



右圖、繪葉書明治十年三月獨逸より
姉崎氏へ寄せられしもの

上圖、明治三十七年十二月二日獨逸
より姉崎正治氏へ寄せられたる書信
の一節

張がはじまっていた時代であり、外務省内枢軸派を中心に二人の恋路を阻むものがいたが、寺崎は上司に認めないと職を辞すと脅して二人を結びつけ、一年後、めでたく生まれたのがマリコだった。

そして、日本では軍部が力をつけ日米開戦への道を突き進む昭和十五年（一九四〇）、兄の太郎は外務省アメリカ局長、つまり日米開戦をめぐる外交の総責任者になり、片や弟の英成は対米外交の最前線のワシントン勤務を命じられて、マリコは「運命の子」となる。

戦争を回避するためには現地情報が必要だが、電話は盗聴される。そこで寺崎太郎は一計を案じ、マリコをもっとも重要かつ基礎的な暗号、すなわち「アメリカ側の対日態度」に使うことにしたのである。たとえば「マリコが病気になる」と言えば「アメリカ側の態度は悪化している」という意味になる。

しかし、寺崎兄弟の願いもむなしく、昭和十六年（一九四一）二月八日午前三時過ぎ、

英成のワシントンから、太郎の東京霞ヶ関へ暗号連絡が入った。「マリコ危篤」。真珠湾攻撃のわずか三十分前であった。

暗号名マリコは死んだがマリコをふくむ弟一家は敵国民として抑留されたのち、日米捕虜交換船で帰国。それからが寺崎兄弟一家にとって「生き地獄」の始まりだった。近衛首相に殉じて職を辞し小田原に逼塞した太郎は、弟一家を引き取るが、特高から「敵性一家」として見張られ、鬼畜米英の風潮のなかでマリコは石を投げつけられ、弟の妻レンは女スパイとあしざまに罵られた。

終戦後、英成は日本政府とGHQの連絡業務をする連絡官として復職、翌年、吉田茂首相から宮内庁御用掛を命じられ、天皇とマッカーサーの通訳担当官になる。そして、弟の引きで太郎は吉田内閣の外務次官に抜擢される。

日本はいまだ占領下の混乱状態にあり、マリコの将来を考えてアメリカで教育を受けさ

せたいと弟・英成から相談をうけた太郎はそれを諾とし、昭和二五年（一九五〇）夏、マリコは母親とともにアメリカへ一時帰ることになった。マリコは十七歳になったばかりだった。太郎は妻の清子とともに、ひよっとしたらこれが永遠の別離になるのではないかと不吉な予感をおぼえながら、二人を横浜港で見送った。つい半年前のことだ。

愛しいマリコを送る我が身も行方定めぬ船出をしたばかりだった。自分を登用してくれた吉田茂だが、最近の対米追従ぶりにつくづく嫌気がさした。辞めるといったら、吉田は狼狽して、当時はまだ官選任命だった京都府知事を用意するといったが、そんな賤別をもらったら男がすたと蹴飛ばして、外務次官からしが不在野の外交評論家になってまだ一年たらずだった。

わが胸中の ウィリアム・ペン

寺崎が「外交官の鑑」として再発見した海旭なら、寺崎のこんな外交官人生をどう評価してくれるだろうか。すでにラジオドラマは終わっており、寺崎はしばし沈思黙考した。と、海旭と自分とをつなぐものを探りあてたような気がした。そうだペンだ、ウィリアム・ペンだ、と寺崎は声に出して叫んでいた。ウィリアム・ペンとは、一七世紀半ば英国に生まれ、敬虔なクエーカー教徒であったため迫害にあい、当時英国の植民地であった新大陸に入植、現在のペンシルバニア州を創立。民主主義の鼓吹者として知られ、その主張はアメリカ合衆国憲法に取り入れられた傑物である。入省したての寺崎が海外研修に送り出されたパリ法科大学博士課程で、テーマに選んだのがこのペンだった。

寺崎は書斎の棚を目でいった。いまでも大切

に保存してある、博士論文「ウィリアム・ペンと平和」を取り出すと、序文の一節をなつかしげに、読みかえした。

「美しい、聞こえのよい言葉で世界を飾り、幻惑するといった知的な虚栄を一切排除して、気負いもなく、世俗的な成功も一切求めず、彼はただ、ひたすらに平和を願った。彼の「ヨーロッパの現在と将来の平和に関する論説」は、世界を鎮め、平穏にしたいという彼の願いの貴重な結実である。しかるになんたることか。世界の現状は静穏に程遠い。事実、世界は、あらゆる戦争につきものの、あるいは無関係の不安と葛藤と怨恨に揺さぶられているではないか」

そうだ、そのとおりだと寺崎は大きくうなずいた。いまもペンの言説は色あせていない、いないどころか、ますます輝きを増しているではないか。寺崎が駆け出しの外交官時代には、第一次世界大戦のあとにできた国際連盟の提唱者として評価されたペンだったが、第

二次世界大戦をへて生まれた国際連合にもペンの精神はしっかりと宿っている。

寺崎は、ひとりごちた。

わが外交の師ウィリアム・ペン。

寺崎がこれまで筋を通すことができたのは、思えば、つねに胸中にペンがいたからだ。いまもペンが外交の師であることに寺崎は満足した。満足して、海旭を思った。そうか、二人には共に強烈なる宗教的なバックボーンがある。ペンはキリスト教の中で反戦平和主義の権化とされるクエーカー教徒。そして海旭はいまでもなく日本をいや世界を代表する仏教者である。だからこそ、ペンも海旭も外交官としても一級であつたのだと寺崎は得心がいった。

いまや外務次官を辞して国家権力から離れて独立。外交官を志したときの原点に立ち返った気がする。自らが阻止できなかった戦争への道を再びわが祖国に歩ませてはならない。野にあつてこそ自由に発言ができる、活動も

できる。そして、何時の日か、ペンに、そして海旭に近づきたいものだとの内心で決意を新たにした。

はじめは洪々ひまつぶしのつもりで聞き始めたラジオドラマだったが、海旭を再発見し、自分の外交の師を思い出させてくれたことに寺崎は深く感謝した。

博士論文をなつかしげに繰りおわって、ぱたりと閉じると、寺崎太郎は表紙をいまいちどみつめて、外務省では語り草となっているべらんめえ調の英語でつぶやいた。

My old respectable diplomat, William Pen,
My new respectable diplomat, Kaikyoku
Watanabe (わが旧き外交の師ウィリアム・
ペン。わが新しき外交の師、渡辺海旭)

*

〈追記〉なお、この時点で寺崎は知りようもなかったが、彼がマリコと母グエンを見送ったときの不安は的中した。このラジオ番組か

ら半年後の八月、弟・英成が脳溢血で急逝。享年五十。アメリカにあった妻グエンは後に再婚、マリコもアメリカに留まった。

マリコは大学を卒業すると社会派弁護士メイン・ミラーと結婚。アメリカがベトナム戦争にのめりこんでいくなかで、反戦運動に参加、ベトナム反戦をとなえて大統領選挙に出馬したマクガバンを応援。平和運動家として頭角をあらわすようになる。そんなマリコ・ミラー・テラサキの存在を知ったノンフィクション作家・柳田邦夫が「マリコ」を描いて話題を呼び、ドラマ化もされた。そのとき寺崎太郎は九十歳になんなんとしていたが、きつと誇らしげにこう快哉を叫んだにちがいない。

血は争えないものだ。よくやった、マリコ。それでこそ弟の愛娘だ、俺の愛しい姪っ子だと。

(この項おわり)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●成

〔特選〕晴れ渡る成人の日の山河かな

中島富士子

成人式の日の若者は、町で見かけてもそれとなく分かるものだが、着物の女性が揃って歩いて行くのは、殊に晴れやかで好ましい。この句は山も河も見えるものすべてが、こぞつて祝おうとしているというのである。

〔佳作〕成人の晴れ着がどつと跨線橋

雨宮 敦子

帆柱に成人の日の風鳴れり

寺下 忠至

機帆船汽笛尾を引く成人日

斉藤 幸雄

●人

〔特選〕人梯子孫に取らせる屋根の羽子

浜口 佳春

もののはずみで、羽子が屋根に飛んで行つてしまった。ここはおじいちゃんの出番である。孫を肩に乗せて取らせる。前には珍しい

光景ではなかったものだが、もう懐かしいものうちに入ってしまった。

〈佳作〉

口重きみちのく人や年の酒

佐藤 雅子

白人の大きなお尻初詣で

斉田 仁

人すべて床しく見えて初詣で

松尾三重子

●自由題

〈特選〉

かけそばの湯気に顔埋め雪の駅

さとうゆう

プラットホームに、ごく狭く出している店がある。それを思い浮かべるとよいように思う。空腹より、寒い雪の日の身を温めるのに、こういう店はありがたい。「湯気に顔埋め」が、その気持ちを表している。

〈佳作〉

ぎしぎしとキャベツを鳴らし夜の水

天野 惣一

マーケットめぐる着ぶくれ一家族

山口 信子

月天心除夜の鐘撞く人の列

増田 信子

岸別自由題

兼題
季節ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

誌上句会〈編集部選〉

■成

成仏の子にも屠蘇あげ慕詣で
高々と成人の日の鯛の反り
梅含むものみな縁の成せる業
意気上がる成人の日の貌の色
成犬となり寒月を連れてくる
冬晴れやあくび成層閣までも
成就の日梅ちらほらと煙る道
その曲はわが早春の未完成
あのこと成らず暦を焼く煙
造成の進む斜面に初日かな

佐藤雅子
河合富美枝
前島格也
工藤浄真
村松芳郎
金井 横
新島朱音
水野由佳
園田亜由美
仁科雄一

■自由題

犬猫の名も連なれる賀状かな
雪囲い器用不器用活かされて
梵鐘の一打に揺るる寒椿
はからひの中に生かされ日向ほこ
厳寒に角又早く香るなり
めらめらと焚火のなかの招き猫
紙つかむ筆の音して雪の降る
冬晴れや観音の指よく光る
浅草の真つ只中の風邪心地
大寒の牛乳箱に鍵の穴
雪しまく梁に富山の置き薬
宝船あぶらが滲みて中華風

成満の僧の笑顔やつばくらめ

坂巻信彦

■人

除夜詣人知れず捨つおもひあり
餅花を可愛ゆくまよめ婆二人
諸人の心洗うて除夜の鐘
人ひとり通れる径の梅ひらく
人日の大中小の招き猫
凍戻り人の形に脱ぐ上着
それぞれの笑うしぐさで成人す
パンと打つ人差指や冬ぬくし

中島富士子
河合富美枝
工藤浄真
前島格也
工藤 掉
明石香恋
中島いづる
鳥羽 梓

締切・二〇一〇年四月二十日
発表・『浄土』二〇一〇年八月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒10510011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係



子の声を聞きたくなって降誕会 岱潤

彼岸の少し前に京都に行った。用事も済み少しばかり時間ができたので、タクシの運転手の勧められるままに、梅を見に隋心院を訪ねた。三月に入っているにもかかわらず満開の梅園、そして運転手の言うとおり観光客も少なく静かに梅を楽しむことができた。またここ隋心院は小野小町ゆかりの寺で、小町が朝夕この水で粧いをこらしたという「化粧の井戸」があり、階段を下りてゆくと、今でも水を蓄え姿を写してくれた。

この水鏡の話としてすぐに思い出すのは、何といってもイソップの肉をくわえ

た犬の話だが、東西を問わず昔から水鏡は悩ましい現象だったようだ。ギリシャ神話ではナルキッソスという青年が、水に映る姿に惚れ込んで、キスもできない苦悩からやがて自害してしまい、そこからナルシズム、さらにナルシストという言葉も生まれたそうだ。

そういえば知恩院にも鐘樓の奥に、自然上人と親鸞聖人出會いの場とも言われる吉水の井戸（法垂るの窟）がある。以前散策したことがあるが、先ほどの「化粧の井戸」とは大違いで、姿の全く写らないよんだ水でがっかりした思い出がある。吉水発祥の地ともいわれているのだから、それこそきれいな水が流れている

てほしかった。八〇〇年御遠忌の環境作りとして、こんな所も整備していただけたとありがたい。（長）

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十六巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年三月二十日

発行 平成二十二年四月一日

発行人

佐藤良純

編集人

大室了皓

印刷所

株式会社 シーディーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇一八・〇八・八二八七

雑誌「浄土」
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝陽院)
堀田卓文(静岡・華回院)
本多義敬(両国・回光院)
真野龍海(芝・天光寺)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

獨どく来らい獨どく去こ

独りで至り、独りにて去る
無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

人は他者との関わりを断って生きられるか

人は自分の生死を考えると、他者との関係を無視することはできません。誕生が両親との係わりによること、友達・親族との繋がりによって、自分の精神が構成されてきたことを知るとき、人の死去も単純な個体の消滅ではないことを弁えなければなりません。生死を無視、忌避する生き方は、享樂主義や浮き草の生き方に繋がります。

この經典の一句は「俺が」という生き方への警鐘です。人は皆、個々に存在価値を持ってこの世に生を受け、其の価値を自覚して生きるべきですが、社会人としての自覚を忘れてはなりません。人は個人的自己と社会人としての自己を調和させて、人生を歩むのです。

法然上人鑽仰会の

本

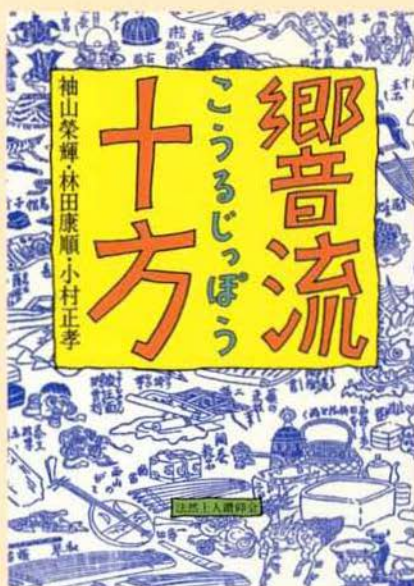
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

「差出人は法然さん」
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



「念佛讀本」完全復刻版
1,600円



巾着袋寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱包料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円



「浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より